

タイ、ベトナム研修報告書

平成18年度研修生 吉野敬子

研修概要

- 1、研修期間 平成18年11月22日～平成19年2月18日
- 2、研修目的 東南アジアの陶芸技法の習得と、その他伝統工芸品の視察。
- 3、研修内容 現代のタイ、ベトナムでの陶業の技術習得
博物館見学
古窯址調査
タイの伝統工芸品の、一村一品政策（OTOP）についての視察

研修の流れ

11月	22日	<p>出発。夜、タイのチェンライに着く。 ソムラック・パンティブーン氏の工房にて作陶。 （飯碗、コップ、急須、高台鉢） 工房の休日を利用し、周辺の博物館や、OTOPのお店に行く。 ライ・メファーロン</p>
12月	1日	<p>チェンセン博物館 ウィアンカロン窯跡、復元品工房 指ろくろによる水瓶工房 など。</p>
	17日	<p>首都バンコクへ移動。周辺美術館、水瓶工房の視察。 国立博物館 スアン・パッカード宮殿 バンコク大学スラートコレクション ラッタナコーシンキルン（ドラゴンジャー工房）</p>
	22日	<p>ベトナム・ハノイへ移動。 ベトナム考古学の研究者である西村昌也さん、西野範子さん夫妻に、ベトナムの文化、歴史について教わりながら、ハノイ周辺の窯場を視察する。 バッチャン村（白磁、安南焼などの大窯業村） トーハー村（15世紀ごろの古窯のある村。現在1軒が操業。土器製造。） ドゥオンサー窯址博物館 フンカイ村（古い窯址のある村。現在1軒が操業。土器製造。） フーラン村（15世紀ごろから続く窯業村。土器製造。） 陶芸家チーゴム氏の工房（白磁、他）</p>
1月	1日	<p>ハノイ近郊の美術館、博物館見学。 ハノイ歴史博物館（青銅器、陶器、その他工芸品） 民族博物館（山岳民族の道具、建築など）</p>
	5日	<p>南部ホーチミンへ ホーチミンからバスで6時間ほど西に向かった場所、ピントゥアン省にある叩きの甕造りの村へ。日本に来たことのある、おばあさんに会う。</p>
	7日	<p>ハノイへ戻る。</p>
	9日	<p>フーラン村へ。3泊4日 伝統的な技法による甕作りを習う。</p>
	12日	<p>ハノイへ戻る。</p>
	15日	<p>ラオス・ルアンパバンへ</p>

	19日	<p>織物の村（バーンパノム） 焼き締め陶器の村（バーンチャン）</p> <p>タイ、チェンマイへ チェンマイは工芸品の生産が盛んな街で、周辺に工房が沢山ある。 主に、陶器工房、銀製品、織物、木彫、伝統傘など。</p> <p>歴史博物館 サンカンペン工芸品通り バーンタワイ工芸村 陶器コレクター、ティー氏宅 陶芸家ソーン・ムアン氏の工房</p>
2月	6日	<p>テクノー・ディンドイ大学 陶磁研究家ジョン・ショウ氏宅</p> <p>スコータイ、シーサッチャナライへ 13～16世紀ごろ、数多くの窯が築かれたタイ中央部の遺跡。 スコータイ歴史公園 シーサッチャナライ歴史公園</p>
	9日	<p>再びチェンマイへ サンカンペン窯址、ワット・パトゥンの陶磁資料館</p>
	12日	<p>チェンライへ移動 再び、最初にお世話になったソムラック氏の工房で最後のまとめ。 素焼きまで済んでいた、急須に釉薬がけをする。</p>
	16日	荷造り
	17日	夜の便でバンコクへ。深夜の便で福岡へ。
	18日	朝、福岡帰着。

はじめに

今回、九州電力株式会社さんの派遣制度によりタイとベトナム行きを希望し、実現することが出来た。東南アジアのこの二国に選んだ理由をまず述べたい。

私は、唐津焼窯元に生まれ、唐津焼を焼いている。唐津焼は、16世紀ごろ韓国から来た陶工によってその技術がもたらされたと考えられている。更にさかのぼれば、中国にその源流がある。タイやベトナムも、昔から中国の影響を色濃く受けた磁器を作り、それぞれに独自の特徴を持つ焼物になっている。実際に研修に行く前に資料で見た限りでは、中国磁器ほどかしこまっておらず、造形的な基礎は中国磁器にありつつも、柔らかな印象を受ける。日本でも昔から、茶人に好まれ、タイの焼物はスンコロク、ベトナムのものは安南焼として、海を渡って輸入されてきた歴史がある。

まずは、その産地を見てみたい、と思った。

だが、それと同時に、東南アジアと言えば、現在、日本に大量に輸入されている焼物の産地だ。それはいわゆる「安物」で、質はあまり良くない。100円ショップで「安南焼」のお皿などが大量に売られているのを見かける。

現代の焼物は、そんな量産品だけなのだろうか。もっと質のいい、現代のベトナムやタイの器はないのだろうか。

そして東南アジアには、磁器だけでなく、甕作りも大きな産業だ。

唐津の13代中里太郎衛門氏が、唐津焼の叩きのルーツを求め、1980年代に何度も調査で東南アジアを周られている。今の唐津の作り方と、どのような共通点があるのだろうか。

焼物について、タイ、ベトナムに期待していたことは、以上のことであるが、東南アジアと言えば、そのほかにも、多くの種類の手工芸品を日本でも見ることができる。大量生産とは言え、素朴な風合いを残した、竹の籠や布、銀製品など、私の興味を引くものが沢山ある国だ。

どんなところで、この工芸品ができているのか、是非見てみたいと思った。

以上のような、少し盛りだくさん過ぎるテーマを持って、3ヶ月間のタイ、ベトナムへの研修へと出発した。

研修の流れの表でわかるように、3ヶ月で、

チェンライ(タイ) バンコク(タイ) ハノイ(ベトナム) ルアンパン(ラオス) チェンマイ(タイ) チェンライ(タイ)

と、移動が多かったため、これより後は、タイとベトナムに分けて、その研修先ごとに記載していく。

タイ編

1、チェンライ、ソムラック氏の工房(3週間滞在)

まずは、タイの北部、チェンライという小さな町の郊外にある、ソムラック・パンティブーン氏の工房から研修がスタートした。周囲はのどかな田園風景が広がる。

唐津の太郎衛門陶房で4年間修行なさった経験のある、ソムラックさんと、その奥様で日本人の珠子さんのご夫妻。右も左もわからないタイで、工房で作陶しながら、一ヶ月間、タイの文化について教えていただいたり、基礎的な会話の勉強などをさせてもらった。毎日日本語で分からない点を質問出来るのは、大変ありがたかった。

工房のスタッフは13人、近くの村の人たちを雇っているようだ。轆轤をひける職人が5人ほどいる。タイ国内のリゾートホテルや海外、特に欧米からの注文も多いとのこと。洋食器風の形状のものから、日常の茶器や酒器、大きな壺類、洗面台の手洗い鉢などさまざまなものを作っている。工房に隣接する店舗には、毎日、タイ人や欧米人の観光客が訪れる。技法的には、ソムラック氏が太郎衛門陶房で修行されていたということもあって、日本の陶器作りとほぼ変わらない工程で行われている。日本と違うのは、轆轤が左回転で作られること。タイの国内は、どこへ行ってもそうで、作らせてもらうときにはそこで躓くことが多かった。そうすぐに変えることはできないので、左回転で通した。

まずは唐津で作っている飯碗やピアカップなどを挽いてみて、店舗に並んでいるものの中で面白いと思った高台鉢と、これまでに作ったことのなかった急須の作り方を教えてもらうことにした。工房の人たちは、みな同世代で、とても親切に教えてくれた。

研修はここから始まり、締めくくりもこの場所であったので、思い出深い場所である。

ここを拠点に、週末には北部タイの歴史を知るため、古窯跡ヴィアンカロンや、チェンセン国立博物館など、ソムラック夫妻に案内してもらう。チェンセン国立博物館には、14世紀の白磁があったが、韓国磁器に似た軟らかな風合いのものだった。これが、現地で目にした最初の古陶であった。



ソムラック氏の工房



チェンセン古陶磁



指口クロ

2、バンコクにて(5日間滞在)

バンコクは現在、日本のバブル期のような勢いで経済発展している街だ。

巨大なビルと、その影にまだ残るスラム街が、急すぎる発展を表わしている。

ここでは、とにかく国中の代表的な工芸品、美術品を数多く見てやろう、という気持ちで過ごした。ソムラックさんや珠子さんに教えてもらっていた美術館を周った。その中でもすばらしかったのは、バンコク大学の第2校舎内にある、大学の持ち主であるスラート氏のコレクションだった。バンコクの国立博物館にもない、質の高いコレクションで、このコレクションを見て、タイだけでなく、クメール(カンボジア)、ベトナム、ミャンマーの器の特徴をしっかりと捉えることが出来た。展示品だけでなく、美術館自体もすばらしく、陶片を手で触ることができるようなコーナーがあったり、タイ、ベトナム、中国の器を、時代ごとに比べる展示など、各所に工夫があった。私設の美術館だからなのか、とても凝った作りだった。更に幸いにもそこで、東南アジアの陶磁研究では有名なロクサナ・ブラウン女史にもお会いすることが出来た(有名な方というのは後で知った話)。と

はいても、言葉が通じず挨拶程度しかできずに終わったのが残念だった。展示品の写真を撮ってもいいと言ってくださり、遠慮なく撮影することが出来た。

もう一つ、バンコクでの大きな収穫だったのは、ドラゴンジャーを作る窯に行くことが出来たことだった。ドラゴンジャーは、ソムラック氏の工房で目にしていた。黒っぽい土で作った甕に、化粧土で大胆に竜の絵を描いてある。その表情がなんとも言えず、ソムラック氏の知り合いの方の工房があるというので是非にと行くことにした。

バンコクから車で1時間ほどのラチャブリという町の、ラッタナコーシンキルンという窯で、4人姉妹で経営し、工場には200人が働いているということだった。工場内も見せてもらったが、恐ろしく広い工場で、どこまで行っても終わりがなく、いたるところで轆轤を回したり、叩きの作業をしたりしている。窯は登り窯で、幅が10メートル長さが30メートルくらいはあったと思う。両サイドの上のほうから薪を投げ入れる形のレンガ作りの単窯だった。そのタイプがもう一つ、他に巨大なガス窯が3基ほどあった。大量生産の現場はあまり見たことがなかったので、規模の大きさにとても驚いた。広大な敷地内に生えている雑木を切って、薪に使っている様子だった。土は、素地に使う土は地元の土で、化粧土は、北部のランパンから持ってきて、使っているとのことだった。昔と比べ、今は水甕の需要が減ったので、伝統的なドラゴンジャーだけでなく、赤や黄色など原色の釉薬を掛けた壺なども製作していた。ホテルの飾り壺として需要があるという。私がすばらしいと感じたドラゴンの絵は、今は型紙を押し当てて刷毛で塗る方法で描くのが主で、指で描ける人は、一人だけだということだった。この技術も、需要の減少とともに消えていくのだろうか。

残念なことに、ドラゴンジャーの窯ではカメラの記録媒体を持っていくのを忘れ、何も写真が残っていない。



スラートコレクション



ドラゴンジャー

3、チェンマイ（約3週間滞在）

タイ北部、第2の主要都市であるチェンマイは、工芸品の製造が国内一盛んな街だ。郊外に行けば、観光向けの大きな工芸品ショップが立ち並ぶ。多数は、店の敷地内に工場があり、買い物をする人は見学することもできる。それだけでなく、街のあちこちで小さな店や工房を見かける。工芸品の品目は多岐に亘っていて、銀細工、木工品、シルク、革製品、陶磁器などがある。

食器の工場を中心に、大量生産の現場も3軒ほど見た。

タイは、国土が広いせいなのか、工場もやたらと広い。働いている人間も多い。日本の輸入雑貨の店などでよく見かける、手取りの重い半磁器は、このあたりの産だろう。日本だけでなく、欧米からの注文が多いという。日本人がデザイナーとして入って、技術指導までしているという工場では、センスのいいものもあった。タイ人がセンスが良くない、というわけではない。生活に焼物の器が根付いていないため、どう改良していいのかわからないのだろう。現代のタイ人家庭では、焼物が使われることがあまりないようだ。飲食店に入っても、高級なところ（もしくは外国人向け）以外は、プラスチックの器で出てくるのが一般的だ。ただ、現在、タイは急スピードで経済発展を遂げている。ソムラックさんの陶房を訪ねる人も、ここ最近は国内旅行を楽しむタイ人が増えてきた、と言っていた。

これから段々と、タイ人のためのオリジナリティのある器作りが始まるのだろう。

現在のタイの器作りは、日本人向け、ヨーロッパ人向け、アメリカ人向けの、無国籍な焼物を、とにかく大量に作り続けている。資源はまだあるのだろうか、と心配になるほどだ。



ジョン・ショウ氏



古陶磁コレクター、ティー氏

4、スコータイ (3日間)

スコータイは、世界遺産の町として沢山の観光客が訪れる町である。13世紀ごろに栄えたスコータイ王朝のレンガ造りの遺跡が、今も状態良く残っていて、見るというより、その空間に包まれ、タイムスリップしたような不思議な気分になる。

スコータイの遺跡公園と、そしてそこからバスで一時間半ほど北へ行ったところにあるシーサッチャナライの遺跡公園内には、14世紀から16世紀にかけて栄えた一大窯業地がある。中国人陶工が技術を伝えたと言われているが、主に青磁や、鉄絵のものなどで、北タイのものに比べて頑丈な作りのものが多い。シーサッチャナライには、ヨム川沿いに300ほどの窯が確認されているという。北の端にある陶器博物館には、窯址を縦に切った状態で見られるようにしてあって、何世代にも亘って、同じ場所に窯を築いていたことが分かる。博物館周辺にも窯址がいくつもそのまま残されているが、それぞれに幾度も同じ場所で作り直されてきたのだろう。陶片もそこここに散らばっている。

対岸にある、当時陶土採取をしていたと言われている場所に行きたかったのだが、女性一人で行くのは危険だ、と博物館の守衛の人に言われ断念。現在は文化財として保護されていて、土の採取は行われていない。

窯址の近くには、古いものの模倣品を作っている工房がいくつかあった。小さい薪窯で焼いているようだった。原料などについて詳しい話を聞きたかったが、通訳なしでは聞くことができなかった。作られているものは、主に青磁で、小壺や皿、ふた物など。他に黒い釉薬の人形などもあった。どれも素朴で美しかった。しかしタイでは、模倣品という位置づけでしかなく、芸術にはなりえないものらしい。昔ながらの技法で作る伝統工芸品は、結局コピーになってしまうのか。ならば日本の焼物はコピーだらけだ。ここでもタイと日本では、焼物に対する考え方が大きく違う。



シーサッチャナライの古窯

5、OTOPについて

OTOPとは、タイの一村一品運動のことで、日本のそれを真似した、タイ政府がすすめる制度だ。OTOPに指定されれば、その村は政府から資金を借りることが出来、その資金で観光のための看板を作ったり、共同の店舗を作ったりと、設備投資ができる。その村に観光客が増えてお金落ちると、国へ返済するという仕組みだ。この制度の目的は、ずばり、伝統工芸支援だ。手工芸は、家庭で代々受け継がれてきたものが多い。織物、焼物、

竹製品、籠作り。ところが、物を作っても店に卸すと安い値段しかつかない。自然と若者は高い収入を得ようと、外に働きに行くようになる。すると、技術が途絶えてしまう。

ランパンにある、一軒のナムトック（水瓶）作りの村を例にとる。OTOPに指定される前は、ほんの近くの村の人でも、水瓶がどこで作られているのか知らなかった。指定されてからは、村の入り口に大きな看板ができて、観光バスであちこちから人が訪れるようになった。観光客が直に買ってくれるので単価が高くなり収入も上がったし、みんなから焼物作りの職人として認識されるようになり、自分の仕事に誇りを持つようになった。村の人も、きれいな村に来てもらおうと清掃の日を設けたりして、村の雰囲気もよくなった。子供も将来は、ナムトックを作ると言っている。いいことだらけのようだ。

その反面、悪い点もある。

指定の範囲が広すぎるのだ。本来、「職人の技」「先祖代々受け継がれた伝統」「その地に産する素材」「その地の気候」をもとに、OTOP指定しているはずなのに、大量生産工場のものも入っていたり、質の良くないものも少なくない。そのせいで、各地にあるOTOPショップはだんだんと廃れつつあるようだ。「売る」ことが先にあると、長続きはしないのだ。逆に本当にいいものを作っているところは、同じように見られることを避けるためか、入っていないところも多いらしい。



ハンケオ村



OTOP制度で看板ができた水瓶の村

ベトナム編

1、バッチャン村（1日）

バッチャンは、13～14世紀ごろから現在まで途絶えることなく陶器製造がされてきたという村。今も、村中の人々は何らかの形で焼物に携わっていて、レンガで造られた工房がぎっしりと立ち並び、その間を細い路地がめぐる。

ここでは石炭窯を使っているところが多く、粉状の石炭に水を加えて足で踏み混ぜて、団子状にして窯の外壁に貼り付けてあるのが面白い。工房内は、声をかければ自由に見学させてくれる。私が見た工房は、どこも型成型で、轆轤はほとんど見なかった。

観光客向けのショップでは、沢山の焼物が売られていた。手描きの染付けの小皿が1枚50000ドンほど。（約40円）これでも観光客向けの値段で高めにつけてあるのだろうから、日本に運んで100円ショップで売っても儲けがでるわけだ。バッチャンの器の6割は外国人向けということであった。

ベトナムではタイとは違って食器は磁器を使う家庭が多いが、残念ながら安く軽くて丈夫な中国産を使うのが一般的だということであった。確かにバッチャンの焼物は、焼きが甘い感じで、強度を保つためか分厚い。そのぼってりとした暖かさが、逆に日本人好みなのかもしれない。素材からくる暖かさは、熱いものを入れ、それを手に持って使う日本人にとっては少々厚みのあっても安心感がある。

別の日に、西村さん宅で、バッチャンの18世紀のものを見せてもらったことがあったが、それは土の感じも汚く質が悪いのが一目でわかった。古いから良いわけではない。同じ窯場でも、需要によってこうも違うのかと驚いた。

それにしても、バッチャンで目についたのは、女性がとにかくよく働いていることだった。石炭を足で踏み混ぜているのも、天秤棒を担いで運んでいるのも女性。肉体労働は女性がするのが当たり前という社会なのか。この驚きは、ベトナムのどこへ行っても続くのだが。



ショップ



石炭窯の燃料



石炭の粉を運ぶ女性

2、フーラン村

フーラン村は、お世話になった西野範子さんが研究している所で、大きな甕などを主に作っている。4日間ほど滞在し、仕事を手伝わせてもらったり、少しだけだが作陶させてもらったりした。ここは、10世紀ごろから焼物を焼いていた可能性があるという、歴史のある陶器村。

バッチャンとは違って、川辺のなだらかな丘陵地に、薪窯があったり薪が積んであったり、レンガ造りの工房があったりと、田舎の窯場といったのどかな雰囲気だ。人々も、心なしか穏やかに見える。

成型は蹴ロクロ。ただし、日本のように作る人間が自分で蹴るのではなく、2人一組で行う。横にいる人が足でロクロを蹴って廻しながら、手許は粘土の輪を作る。もう一人はロクロの板の上でその輪を積み上げながら形作っていく。見る見る間に、大きな甕が出来上がる。感動するほどシステマティックな動きだ。成型を少しやらせてもらったが、内側を引っ張るように延ばす方法に慣れず、難しかった。

ロクロは女性の仕事で、熟練陶工はみな女性。工作中きゃっきゃと話しながらも、その手は止まらない。男性は、窯焚きや運搬などの際に活躍していたが、割とのんびりしていた。

現在は、水甕の需要が減って、冥具（人が亡くなったときに骨を入れる箱）を作る窯が多かった。そのほか、大きな壺に立体的な装飾を施して飾り壺を作るところもあった。昔は食器も作っていたそうだが、今は大物ばかりを作っている。



冥具



蹴りロクロ



現代的？な飾り壺

3、チャム族の村

南部ホーチミンからバスで8時間ほどかけて、叩きの村へ行った。

そこは、10年以上前に佐賀であった『世界炎の博覧会』の際に叩きの実演者として招かれ、日本に来たことのある女性がいる。事前に見たビデオで、是非この村に行ってみたいと思っていたところ、西野さん、西村さんが、「チャム族の村だろう」と大まかな場所を教えてください、住所を頼りに向かったのだった。

村に着いたのは既に夕方、どこが焼物の村なのか、という風情の、南の方らしい木造りの家が立ち並ぶ集落だった。英語を話す人すらいない田舎でどうなることかと思ったが、持ってきたPCで写真を見せると、「こっちにいる」と言って映っている女性のところで連れて行ってくれた。

女性は薄暗い土間に座り、ペタペタと壺を叩いていた。成型は、直径 30 センチほどの丸い木の台の周りを人間がまわって作る、人間ロクロ。それが土間の片隅にすえてあった。工房と言っても、ほかには庭先に粘土らしき土が寄せてあるくらいだった。窯がなく、野焼き焼成して仕上げる。釉薬をかけるわけではないので他には必要なものはないのだった。造っているものはスープの鍋やご飯を炊く釜など。ロクロで成型したものを、少し水分が飛んだところで、底の部分の角を削ったり叩いたりして丸くする。一つ持たせてもらったら、びっくりするほど薄くて軽かった。それでも出来上がりは、土が緻密なためか丈夫そうに感じた。通訳なしでは詳しい話を聞くこともできなかったが、その女性が、手を全く止めないことに、焼物を作ることが生活の一部であることを感じた。土器の中ではこの生活用具は本当に形が美しく、本当なら造り方を教わりたい場所であったが、残念ながら通訳も時間もなかったため、機会を逃した。



4、陶芸家チーゴム氏の陶房

ハノイからバスで 30 分ほどの場所に、チーゴム氏の陶器工房がある。今は息子の 3 兄弟が主で切り盛りしている、若い窯だ。スタッフは 20 名ほど。食器作りが主だが、タイルでモザイクを製作したり、オブジェのようなものも作っていた。息子さんは大学でアートを専攻したとのことで、焼物でアクセサリーを作って、ハノイの街で売っているとのことだった。

バッチャンの原料と同じ白い土を原料にしたものと、近くで掘ってくるという、茶色く焼きあがる粘土のものとあって、日本からも依頼があるという。「日本人はとても細かく注文をつけてくる」と言っていたが、「おかげで技術が上がったので、良かった」と、とても前向きだった。

だが、数年前、日本からの依頼で 1 万個の急須を納めたのに、代金が 2 割しか支払われていないという話を聞いたときには、なんとも恥ずかしい気持ちになった。ベトナム人の業者が間に入っているとのことで、どの段階でそんなことになったのか分からない。「同じ日本人として謝る」というと、「大丈夫、おかげでみんな腕が上がった」と言っていた。

この工房は、バッチャンほどの大量生産体制はないかわり、ロクロを挽く技術があるし、自分たちで何か新しいことをしよう、という意欲がある。これからもっと質の高い物ができてくる可能性を秘めていると思った。



モザイク製作



手回しロクロ

研修を終えて

とりとめもなく、タイ、ベトナムで見たり聞いたり体験したりしたことを書き連ねたが、本当はまだまだ、自分の中で消化しきれていないところもあって、伝え足りない感じだ。

3 ヶ月間、思ったよりも精力的に色々な場所に行き、この目で見るのができたと思う。

その中でずっと考え続けたのは、日本人の感性についてだった。

東南アジアに行ってみて初めて、器に対する考え方が、同じアジアでこうも違うのかと驚いた。器を取り合わせて楽しく使い、食事一つに喜びを見出すというのは、日本人独特な感性であり、その需要に合わせて日本国内でさまざまな焼物が生まれてきた。

この考え方は、お茶の教えが大きいように思う。日本のお茶の世界では、茶碗やその他の道具に、道具以上の芸術性を求めた。今ではお茶は、何か特別なもののように感じるが、実は私たちの生活に生きている。芸術を生活から切り離さない、鑑賞するだけでなく、芸術を楽しみながら使う。すばらしい文化だと思う。

これからその点をもっと勉強し、唐津焼が存在する意味とは何なのか考えながら、今後の作陶に取り組んで行きたい。

それと話は変わるが、タイもベトナムも、経済発展と同時に、環境破壊がすごいスピードで進んでいる。タイでバスで移動中、荒れ野原が続く風景を見ながら「荒地にせずに田んぼでも作ればいいのに」と怠けているように感じていた私だが、そこが昔はジャングルだったと聞いてとても恥ずかしく思った。東南アジアの木材は、一時期大量に日本にも入ってきていたはずだ。近年、タイでは普通の川の水量が減り、雨季の洪水が増えたという。木を切ってしまったこともその一因ではないだろうか。

将来、日本的な考え方である、「ものを大事にする文化」を、東南アジアにも伝えていけたらすばらしいことだと思う。「日本は、TOYOTA、HONDAだけじゃない、すばらしい物作りの文化と、物との『付き合い方』の文化があるんだよ」と。

最後に、研修にあたって、多くの皆様のご指導を頂いた。

心より感謝し、これからの活動でその恩をお返ししていきたいと思っている。